

Title	はじめに : アート・センター開設10周年記念を迎えて(芸術のプロジェクト)
Sub Title	Preface(Projects Art)
Author	前田, 富士男(Maeda, Fujio)
Publisher	
Publication year	2004
Jtitle	Booklet Vol.11, (2004.) ,p.3- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000011-04211274

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

——アート・センター開設10周年記念を迎えて——

芸術家の仕事とは、なにか。そう問われたときのために、乾きがちな心の砂地にきざみこんできた言葉がある。

芸術家の仕事とは、「もはや意識されなくなってしまったものを、まだ意識されていないものに組みこむこと、ずっと昔に過ぎ去ったものを、まだ全然現れていないものに組みこむこと」、それ以外の何ものでもない——。

ドイツの思想家エルンスト・ブロッホは、そう語った。石畳を急ぐ軍靴の足音が聞こえる1937年に、画家のマルク・シャガール、パウル・クレー、フランツ・マルクたちの作品を念頭において書かれた短い評論の一節である。時代状況や表現主義美術云々といった背景を顧慮する必要は、いまはない。

21世紀に暦をめくって数年をへた現代でも、このブロッホの言葉の鋭さは、およそ翳るところがない。消費社会はあらゆる商品を、人間の欲求をみたすための生産物ではなく、人間の欲望をみたすための記号に置き換え、コンピュータ社会は、芥子粒ほどの記憶演算装置をユビキタスに配置しつつあるとしても、芸術家の仕事に変わりがあるはずもない。芸術のプロジェクト——それは、まさに「もはや意識されなくなってしまったものを、まだ意識されていないものに組みこむこと」と言い換えてよい。

慶應義塾大学アート・センターは、1993年10月に開設された。石川忠雄塾長時代に辻岡昭理事、小谷津孝明文学部長を中心に設立が準備されていたアート・センターは、1993年に就任された鳥居泰彦塾長のもとで学外からの貴重なご支援もえて、同年10月1日、若林真所長をリーダーに新しい大学付属研究所としてのスタートを切った。

慶應義塾大学アート・センターは、設立準備期間のあいだにその構想を入念に検討し、開設に際して五つの理念を掲げた。第一に、成熟した社会にふさわしい「人間教育」としての文化的感性の醸成、第二に、新しい文化的価値の創出を可能にする「トランス（横断的）・アート」の探求、第三に、未来の文化・芸術活動を展望しうる学術的「情報発信」、第四に、アート・マネジメントに関連する諸学問領域を「学際的」にむすぶ活動、第五に、学内外・国内外の枠にとらわれない創造的な「オープン・フォーラム」の開放性への指向、である。

ややもすると、こうした理念は一読されるばかりで、さほど実行意思に裏打ちされない言辞と理解されかねない。だが、この理念には「芸術のプロジェクト」の強い自覚と使命が託されていると言わねばならない。それは、若林真所長が『慶應義塾大学アート・センター年報』創刊号に寄稿された巻頭の一文「アートが形象する慶應義塾——飯田善國の作品に事寄せて」に明らかだ。若林真所長は、ご自身が専門に研究されたフランスの作家アンドレ・ジッドのニックネーム「羅針盤の無い航行者」をひき、こう語りかける——アート・センターという研究所、ひいては慶應義塾そのものが、この展望を欠いた現代社会の海にあって「羅針盤の無い航行者」たらんとする自負と覚悟を持たねばならない、そもそも福澤諭吉がそうであったように、と。

羅針盤を持たない優れた航行者はむろん、芸術家や文化活動の領域にとどまらず存在するだろう。しかし、こと芸術家という航行者に即してみれば、「羅針盤の無い」事態とは、「もはや意識されなくなってしまったものを、まだ意識されていないものに組みこむ」ような、しずかで強いプロジェクトの決意に支えられているにちがいない。

慶應義塾大学アート・センターは、若林真所長について1995年から2003年9月まで在任された鷲見洋一所長のもとで多くの試みを実践し、豊かな成果をあげてきた。本誌の多様な論考にその反映をみていただければ、幸いである。いま私たちは、設立理念をあらためて想起し、さらに芸術のプロジェクトをより一層ゆたかで深いものに発展させてゆく所存である。ここに設立10周年を記念し、「慶應義塾大学アート・センター／ブックレット」11号12号を同時に刊行することとした。

これまでアート・センターにご協力ご支援をいただいた学内外の方々、また塾生諸君に御礼申し上げるとともに、今後ともより一層のご指導とご援助を賜るようお願い申し上げます。

慶應義塾大学アート・センター所長 前田富士男